

Title	J.S.ミルにおける快樂の秩序：分類と序列化
Sub Title	Order of pleasures in J. S. Mill's hedonism: classification and order of values of pleasures
Author	水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.126 (2011. 3) ,p.81- 106
JaLC DOI	
Abstract	J. S. Mill' hedonism introduced the view that there are different qualities of pleasures into Bentham's utilitarianism. But he made a further view concerning pleasures. In order to clarify his view I argue that (1) In his view various pleasures can be classified into three departments corresponding to three departments of "Art of Life": Morality, Prudence or Policy, and Aesthetics, (2) values of pleasures are ordered according to the degree of contributions to the "sense of dignity" and development of "individuality". "Sense of dignity" is "the feeling of personal exaltation and degradation which acts independently of people's opinion, or even in defiance of it". Individuality has at least five aspects that are (a) self-affnity, (b) self-control, (c) harmony, (d) development of human faculties, and (e) energy.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000126-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

J. S. ミルにおける快樂の秩序

—分類と序列化—

—水 野 俊 誠*

**Order of pleasures in J. S. Mill's hedonism:
classification and order of values of pleasures***Tosinari Mizuno*

J. S. Mill' hedonism introduced the view that there are different qualities of pleasures into Bentham's utilitarianism. But he made a further view concerning pleasures. In order to clarify his view I argue that (1) In his view various pleasures can be classified into three departments corresponding to three departments of "Art of Life": Morality, Prudence or Policy, and Aesthetics, (2) values of pleasures are ordered according to the degree of contributions to the "sense of dignity" and development of "individuality". "Sense of dignity" is "the feeling of personal exaltation and degradation which acts independently of people's opinion, or even in defiance of it". Individuality has at least five aspects that are (a) self-affinity, (b) self-control, (c) harmony, (d) development of human faculties, and (e) energy.

*慶應義塾大学大学院文学研究科倫理学専攻博士課程

はじめに

J. S. ミルは、快樂には量の差だけでなく質の差があるという考え方を、功利主義の枠組みのなかに持ち込んだ。しかし、快樂に関するミルの考え方の特質は、快樂に質の差を認めることだけではない。彼は、快樂に関してさらに踏み込んだ議論をしている。本稿では、彼のそのような議論を明らかにすることを試みたい。

具体的には、生活の技術 (Art of Life) なるものの3つの部門すなわち道徳 (Morality)、処世の思慮 (Prudence)、審美 (Aesthetic) を手掛かりにして、さまざまな快樂を3つの領域に分類することができることを明らかにしたい (I)。くわえて快樂の価値が、尊厳 (の感覚) と個性 (の発展) に対する貢献の大きさに応じて序列化されていることを明らかにしたい (II)。

I. 快樂の分類

1. 生活の技術の3部門

生活の技術について説明するために、まず技術とは何かを見ておく¹。『論理学体系』においてミルは、科学 (science) と対比して技術 (art) について述べている。

技術の規則が科学の学説に対しておかれている関係は、次のように性格づけられるだろう。技術は、到達すべき目的を提出し、その目的を定義してそれを科学に手渡す。科学は、その目的を受け取り、研究すべき現象または結果としてその目的を考察し、その目的の原因と条件とを調査して、その目的が生み出される諸事情の組み合わせについての定理を加えて、その目的を技術に差し戻す。すると技術は、これらの事情の組み合わせを検討して、その組み合わせのうちでどれが人間の力によって可能か否かに応じて、その目的が達成

できるかどうかを宣言する。それゆえ、技術が供給する唯一の前提は、最初の大前提であり、それは与えられた目的が望ましいと断定する。次に科学は、ある行為を遂行すればその目的を達成できるであろうという（一連の帰納または演繹によって得られる）命題を与える。これらの前提から、技術は、これらの行為の遂行は望ましいと結論し、その遂行が実行可能でもありと分かれば、その定理を規則や指令に変えるのである (CW8, 944-5)。

しかし各技術の目的をその手段と結合する推論は、科学の領域に属するが、目的そのものの定義はもっぱら技術に属し、その個別的な領域を形成している。各技術は、科学から借りたのではない一つの第一原理あるいは一般的な大前提を持っている。それは、目指される目的を明確に述べ、その目的が望ましい目的であると主張しているものである。建築業者の技術は、建築物を建てることは望ましいことを前提する。（美術の一つとしての）建築術は、建築物を美しくあるいは堂々たるものにすることが望ましいことを前提する。衛生学は健康の維持が適切で望ましい目的であることを前提し、医術は疾患の治癒が適切で望ましい目的であることを前提する。これらは科学の命題ではない。科学の命題は事実の事態、すなわち実在、共存、継起、類似を主張する (CW8, 949)。

まず個々の技術は、ある目的を提示する。たとえば、建築術は、建物を建てるという目的を提示し、医術は病気の治癒という目的すなわち大前提を提示する。つぎに、科学は、ある行為を行えば当該の目的を達成できるであろうという事実についての知識すなわち小前提を提供する。最後に、技術はこの2つの前提から、当該の行為の遂行が望ましいと結論し、その行為が人間の力で実行可能であるならば、その行為の遂行を命じる規則ま

たは指令を導き出す。したがって、技術とは、目的を設定し、科学的知識の助けを借りて、その目的を達成するための実践的規則を提出するものである²。

つぎに、ミルは、生活の技術について次のように述べている。

今述べられた〔技術の：引用者〕命題は、何かがあることを主張せず、何かがあるべきであることを命令したり勧告したりする。述語が「あるべき (*ought or should be*)」という言葉で表現される命題は、「ある」または「あるだろう」という言葉によって表現される命題とは異なる。確かに、言葉の最も広い意味では、これらの命題でさえ事実の問題として何かを主張している。それらの命題において肯定された事実は、勧告された行動が話者の心のなかに是認の感情を喚起することである。しかしこのことは、問題の根底に到達しない。というのは、話者の是認は、他の人々が是認すべきことの十分な理由にならないし、話者自身に関してさえ決定的な理由になる必要はないからである。実践の目的のために、各人は自分の是認を正当化することを要求されねばならない。そしてこのためには、何が是認の適切な対象か、それらの対象の間で適切な優先順位はどのようなものかを決定する一般的な前提が必要である。

これらの一般的な前提 (*general premises*) は、それらから演繹されうる主要な結論と一緒にあって、生活術 (*Art of Life*) と呼ぶのが適切な一連の教説を形成している (あるいはむしろ形成するかもしれない)。生活の技術は、3つの部門、道徳 (*Morality*)、処世の思慮 (*Prudence*) あるいは方針 (*Policy*)、および審美 (*Aesthetic*)、すなわち人間の行動と作品における正しさ、便宜、美しさあるいは高貴さ (*the Right, the Expedient, and the Beautiful or Noble*) からなる。(その主要な部分において、残念なことに依然としてまだ

創造されていない) この技術に対して、他のすべての技術は従属的である。生活の技術の諸原則は、すべての個々の技術の特殊な目的が価値を持ち望ましいかどうか、望ましい事物の尺度においてその位置はどこかを決定しなければならないものである (CW8, 949)。

命令したり勧告したりする技術の命題は、命令・勧告された行為が話者の心の中に是認の感情を喚起するという事実を主張している。この是認の対象を正当化し、それらの対象の間で優先順位を設ける一般前提すなわち生活の技術の諸原則と、それから導き出される個々の技術との総体が、生活の技術と呼ばれている。すなわち生活の技術とは、個々の技術の目的が望ましいかどうか、またそれらが対立する場合にはどれが最も望ましいのかを判定する一般前提と、個々の技術との総体である。この生活の技術は、道徳、処世の思慮、審美の3つの部門からなる。そして道徳の目的は行為の正しさであり、処世の思慮の目的は行為のもたらす便宜であり、審美の目的は行為の美しさまたは高貴さである。このようにミルは述べている。したがって、個々の技術の目的が望ましいかどうかを判定し、またそれらが対立する場合にはどれが最も望ましいかを判定する一般前提とは、問題となっている行為などが正しいものであるべきだという道徳の原則、当該の行為などが便宜を促進すべきだという処世の思慮の原則、当該の行為などが美しく高貴なものであるべきだという審美の原則であると考えられる。

本節の内容をまとめると以下ようになる。すなわち、ミルのいう生活の技術とは、個々の技術の目的が望ましいか、またそれらが対立する場合にはどれが最も望ましいかを判定する一般前提と、個々の技術との総体であった。そしてこの生活の技術は、道徳、処世の思慮、審美の3つ部門からなっていた。

2. ライリーの議論

ところでライリー (Jonathan Riley) は、ミルのいう功利³ を、生活の技術の3つの部門に対応させて、功利を道徳の領域、処世の思慮の領域、審美の領域の領域に分類している。ライリーはまず、ミルのいう功利を、自己に関わる (self-regarding) 種類の功利と、他人に関わる (other-regarding) 種類の功利とに分けることができるとする。自己に関わる功利とは、「他人に危害または利益をあたえるという証拠がない」行為がもたらすものであり、他人に関わる功利とは、「他人に危害または利益を与える証拠がある」行為がもたらすものである⁴。

たしかにミルは次のように述べて、自己に関わる人生の部分と、他人に関わる人生の部分との区別を認めている。

しかし個人とは区別されたものとしての社会が、たとえ持つとしても間接的な利害関心しか持っていない行為の領域がある。すなわち、その領域は、人間の生活と行為のうちで、彼自身にだけ影響するか、あるいは他人に影響するとしても、他人が自由に自発的にまた騙されずに同意し参加しているような部分のすべてからなっている。彼自身にだけ、と私がいうとき、それは、直接的に、また第一義的に、という意味である。……そうすると、今述べたことが、人間の自由に固有な領域なのである (CW18, 225)。

ここでミルは、第一義的には自分自身にだけ関わる生活の部分で、それ以外の領域すなわち他人に関わると生活の部分から区別している。この区別に対応して、すべての功利を自己に関わるものと他人に関わるものに分類することができるという考え方を、ミルのうちに見て取ることができるとライリーは解釈している。

さらにライリーは、自己に関わる功利を、審美と処世の思慮という2

つの領域に分けている。彼によれば、ミルにおける「審美的功利 (aesthetic utilities)」の特徴は、「自己完成または自己発展のリベラルな観念との連合」⁵であるとされる。そして彼は、自己に関わる功利のうち、人格の改善をもたらすと考えられるものを審美的功利とし、人格の改善をもたらさないと考えられるものを処世の思慮の功利としている。ミルにおいて自己に関わる功利を、審美の領域と処世の思慮の領域とに分けることができる証拠としてライリーがあげているのは、「自分自身に対する義務という言葉は、それが処世の思慮以上のものを意味するときには、自己尊重あるいは自己発展を意味する」(CW18, 279) という『自由論』の一節である。ここでミルは、自己に関わる事柄を、処世の思慮と自己発展すなわち審美とに分けているとライリーは解釈するのである。

一方、ライリーは、他人に関わる功利を、道徳と処世の思慮の領域に分けている。他人に関わる功利のうち、処罰すべき行為がもたらすものを道徳の領域に含め、処罰すべきでない行為がもたらす功利を処世の思慮の領域に含めている。ミルが他人に関わる功利を道徳と処世の思慮に分けているというこの解釈を支持する証拠としてライリーがあげているのは『功利主義論』の以下の箇所である。

誰かが行えば何らかの方法で処罰されるべきだ (ought to be punished) というつもりがない事を、我々は悪 (wrong) と呼んだりしない。何らかの方法とは、法律によらないときには世論によって、世論によらないときは本人の良心の呵責によってということである。これが道徳 (morality) と単なる便宜 (simple expediency) を区別する真の分岐点であろう (CW10, 246)。

他人に関わる事柄のうち誰かが行えば処罰されるべきだと我々が考えるものを、ミルは悪 (wrong) と呼んでいる。悪の反対は正 (right) であり、正

J. S. ミルにおける快樂の秩序

しきはすでに見たように道徳の領域の最高価値であった。したがってミルにおいて、処罰の対象となる事柄は道徳の領域に属する。一方、誰かが行っても処罰されるべきでない和我々が考える事柄は、単なる不便をもたらす。Iで見たように便宜と不便は、処世の思慮の領域における評価規準であった。このようにミルは、処罰の対象になるかどうかによって、他人に関わる事柄を道徳の領域と処世の思慮の領域に分けている。

ミルのいう功利は快樂と苦痛の不在とを意味しているので、今見たライリーの解釈は、ミルのいう快樂を、生活の技術の3つの部門すなわち道徳、処世の思慮、審美に対応させて分類することができるということを含意している。

ミルのいう功利すなわち快樂を、生活の技術の3つの部門に対応させて分類できるという点について、ライリーは自分の解釈を支持する証拠をあげていない。その証拠としてあげることができるのは、『論理学体系』の以下の箇所である。

道徳の基礎についての理論は、それを広く議論するのはこのような著作では場違いであり、有益な目標のために偶然に扱われることができない問題である。それゆえ、直覚的な道徳原理の教説は、たとえ正しいとしても、道徳と適切に呼ばれる行動の部分だけを考慮に入れるだろうということに満足しておく。生活の実践の残りの部分については、何らかの普遍的原理あるいは規準が依然として追求されなければならない。その原理が正しく選択されれば、処世の思慮 (Prudence)、方針 (Policy)、趣味 (Taste) の究極原理としてだけでなく、道徳 (Morality) の究極原理としても全く同じように役立つことが分かるだろうと私は理解する。

ここでは私の意見を正当化することを試みることに、あるいは私の意見が許容する種類の正当化を擁護することさえ試みることをせ

ず、次のような私の確信を端的に断言する。すなわち、実践のすべての規則が従うべき一般的な原理、およびそれらの規則が試されるべきテストは、人類の幸福への貢献の原理、あるいはむしろすべての感覚を持つ存在者の幸福への貢献の原理である。言い換えれば、幸福の促進が目的論の究極原理である (CW8, 951)。

道徳、審美、処世の思慮の究極目的は、幸福の促進であるとミルは述べている。つまり、道徳の技術は行為の正しさを、審美の技術は美または高貴さを、処世の思慮の技術は便宜を目的としているが、それらの技術の究極目的は幸福をもたらすことである。そしてミルのいう幸福は、第一義的には快楽を意味している。したがってミルのいう快楽即ち幸福は、道徳の技術がもたらすもの、審美の技術がもたらすもの、処世の思慮がもたらすものに分類することができるだろう⁶。

3. 生活の技術がもたらす快楽

それでは、道徳、処世の思慮、審美という生活の技術がもたらす快楽を、ミルのテキストのなかに見出すことができるであろうか。まずミルのテキストのなかで道徳の技術がもたらす快楽に該当する考えられるものとしてあげられるのは、道徳感情の快楽などである。道徳感情の快楽という言葉は『功利主義論』のなかに見られる。

けれども、エピクロス派の人生観として知られているもので、知性や、感情と想像力や、道徳感情やらの快楽 (pleasures of the of the intellect, of the feelings and imagination, and of the moral sentiments) に単なる感覚の快楽をはるかにうわまわる高い価値を与えていないものはない (CW10, 211)。

J. S. ミルにおける快樂の秩序

ここでミルは、エピクロス派の論者が単なる感覚の快樂よりはるかに高く評価しているものとして、知性の快樂、感情と想像力の快樂とともに道徳感情の快樂をあげている。道徳感情の快樂とは、道徳感情がもたらす快樂あるいは道徳感情に伴う快樂であろう。この快樂は、処世の思慮の技術や審美の技術がもたらすものではなく、道徳の技術がもたらすものであると考えられる。

つぎに、ミルのテキストのなかで審美の技術がもたらす快樂に該当する考えられるものとしてあげられるのは、美の快樂、音楽の快樂、詩の快樂、装飾の快樂などである。審美の領域に属する快樂としてまずあげられるのは、美の快樂あるいは審美的快樂である。

しかし、新聞や雑誌の著述家だけでなく、影響力はあるが見かけ倒しの本の著者を含む凡庸な大衆は、この浅薄な誤りを常に犯してきた。彼らは功利主義という言葉を知ったが、その発音以外それについて何も知らないで、その言葉によって、いくつかの形の快樂、すなわち美 (beauty)、装飾 (ornament)、娯楽の快樂の否認と無視を習慣的に表現する (CW10, 209)。

美の快樂と装飾の快樂は、審美の領域に属するものと考えられる。とくに美の快樂は、この領域に属する快樂の総称である。

審美の領域に属する快樂としてつぎにあげられるのは、音楽の快樂である。

たとえば音楽といった快樂 (any given pleasure, as music)、健康といった苦痛の不在は、幸福と呼ばれる集合体の手段とみなされるべきであるとも、そういうわけで望まれるべきであるとも、功利の原理はいわないのである。音楽や健康は、それ自体において、それ

自体のために望まれておりまた望ましいのである (CW10, 235).

ここでミルは、幸福のための手段であるだけでなくそれ自体のために望まれておりまた望ましい快樂の例として、音楽の快樂をあげている。

審美の領域に属する快樂として、さらに詩の快樂をあげることができる。たとえば『自叙伝』のなかで、ミルは次のように述べている。「私は、ワーズワースの詩を読んで、万人によって共有されることができ共感の快樂と想像力の快樂あるいは内的喜びの源泉を見出すように思われた (CW1, 151)」。ミルがワーズワース (William Wordsworth) の詩から汲み出した共感の快樂と想像力の快樂は、詩の快樂であるといえる。

最後に、ミルのテキストのなかで処世の思慮の技術がもたらす快樂について見ておく。すでに見たように処世の思慮の目的は、道德や審美以外の便宜一般をもたらすことであった。つまり処世の思慮は、さまざまな行為の結果を衡量して自分の便宜を目指すものである。たとえば、健康の快樂、肉欲の快樂 (CW10, 212)、知的な嗜好がもたらす快樂 (CW10, 213)、娯楽の快樂 (CW10, 209) などにはこれに該当するだろう。このように処世の思慮という技術がもたらす快樂は、自分の便宜を促進するもののうち、道德の技術や審美の技術がもたらすものを除いて、知的快樂から感覺的快樂までさまざまな快樂を含むと考えられる。

II 快樂の序列化

これまで、ミルにおける快樂の分類について述べてきた。それとは別に快樂の価値の序列についての議論がミルのテキストのなかに見出される。

ミルの考え方では、これらの快樂の価値は、尊厳 (の感覺) と個性 (の発展) に対する貢献の大きさに応じて序列化されるのである。まず前者についてみていく。

1. 尊嚴の感覺

『功利主義論』においてミルは次のように述べている。

快樂における質の相違という言葉で私が何を言いたいのか、あるいは、量が多いということによらずに、単に快樂として、一方の快樂をもう一方の快樂より価値があるものにするのは何かと尋ねられたら、可能な答は1つしかない。2つの快樂のうち、両方を経験したすべての人またはほとんどすべての人が、一方の快樂を選好すべきだという道徳的責務のどのような感情とも関係なく、決然と選好する快樂があるとすれば、それがいっそう望ましい快樂である。2つの快樂の両方を熟知している人々が、一方をもう一方よりはるかに上位におき、いっそう大きな不満足を伴うと知っていてもそれを選好し、彼らの本性が受容可能ないかなる量のもう一方の快樂と引き換えにも、もとの快樂を放棄しようとしなければ、我々はその選好された楽しみに、比較するときに量を取るに足らない事柄にするほど量を圧倒する、質の優位を帰すことが正当である (CW10, 211)。

2つの快樂の両方を経験し熟知している大多数の人々が、一方の快樂をもう一方の快樂よりはるかに高く評価し、いかなる量のもう一方の快樂と引き換えにももとの快樂を放棄しようとしなない場合、その選好された快樂が質の点で優れているとミルは述べている。そして、このような異質な快樂について、彼は続けて次のようにいう。

ところで、両方の快樂を同じように熟知し、同じように評価し享受できる人々が、彼らの高次能力を行使する生き方にきわめてはっきりした選好を示すことは、疑いのない事実である。獸の快樂の最大限の支給という約束と引き換えに、人間より下等な動物のどれかに

変えられることに同意する人間は、ほとんどいないだろう。愚か者、のろま、悪漢のほうが自分たち以上に自分の運命に満足していると説得されたとしても、知的な人が愚か者になることに同意しないだろうし、教育のある人が無学な人に、思いやりのある良心的な人が利己的で卑怯な人になろうとは思わないだろう。……しかし、これらの負担にもかかわらず、このような人が、より劣等な生存と感じるものに身を落とそうとは決して現実に望むことができない。……この気の進まなさを好きなように説明して差し支えない。我々はそれを誇りに帰すかもしれない。誇りは、人類が抱くことができるもっとも賞賛すべき感情のあるものにも、もっとも非難すべき感情のあるものにも無差別に与えられる名辞である。我々は、その気の進まなさを、自由と人格的独立への愛に帰すかもしれない。その愛に訴えることは、ストア派にとって、その気の進まなさを教え込むための最も有効な手段であった。我々はそれを、権力への愛や高揚への愛に帰すかもしれない。権力への愛と高揚への愛の両方が、その気の進まなさに現実に入り込みそれに寄与している。しかし、その最も適切な名称は尊厳の感覚 (sense of dignity) である。すべての人は何らかの形で、高次能力と正確にはないがある程度比例して、尊厳の感覚を持っている。この感覚はそれが強い人の幸福の本質的な部分をなしているのです、これと対立するものは、瞬時を除けば彼らにとって欲求の対象になることができないだろう (which is so essential a part of happiness of those in whom it is strong, that nothing which conflicts with it could be, otherwise than momentarily, an object of desire to them.) (CW10, 211-2).

ミルは、知性、想像力、道徳感情をはじめとする高次能力の使用がもたら

J. S. ミルにおける快樂の秩序

す精神的な快樂を「高級 (higher)」と名付け、そのような能力を必要とせず愚か者や動物でも感じるような肉体的な快樂を「低級 (lower)」と名付けている (CW10, 212)⁷。快樂をこのようにに區別する一つの規準は、誇り、自由と人格的獨立への愛、権力への愛、高揚への愛といってもよいが、尊嚴の感覺 (意識) というのがもっとも適切であるとミルは述べている。「尊嚴の感覺」とは「他人の意見に頼らず、あるいはそれを無視して働くことさえある人格的高揚と墮落の感情 (feeling)」(CW10, 95-6) であるとされる。このように、ミルにおいて尊嚴の感覺は、さまざまな快樂を高級なものと同級なものに分類するための一つの規準になっている。

さらにいうとこの尊嚴の感覺は、幸福の本質的な部分であると彼はいうのである。そこで幸福と快樂を同一視するミルにとっては、尊嚴の感覺は重要な快樂の一つにもなる。尊嚴の感覺が重要な快樂の一つであるというのは、尊嚴の感覺がもたらす快樂が重要な快樂の一つであるということのショートハンドの言い方であると考えられる。そこで、尊嚴の感覺がもたらす快樂に反するものは、欲求され続けることができないということになる⁸。

2. 個性

さらにミルにおいてさまざまな快樂の価値を序列化するもう一つの規準として、個性 (の發展) への貢獻という規準がある。この規準は一見したところでは明らかではないが、『功利主義論』と『自由論』を整合的に読み解いていけば見出される。

2.1 個性のいくつかの側面

個性の發展に貢獻する快樂というときに、そこでいう個性とは何だろうか。ミルのいう個性には、以下に述べるようないくつかの側面を見出すことができる。

(a) 自己適合性

ミルは個性について『自由論』第3章で詳しく述べている。そこで個性は、性格を持つことと規定されている⁹。性格を持つとはどういうことか。それについてミルは次のように論じている。

欲求と衝動が自分自身のものである人、欲求と衝動が自分自身の陶冶によって発展させられ、変化させられてきた自分自身の本性の表現になっている人は、性格(character)を持つといわれる。蒸気機関が性格を持たないのと同じように、欲求と衝動が自分自身のものでない人は性格を持たない。もし、彼の衝動が自分自身のものであるだけでなく、強いものであり、強い意志の支配下にあるならば、彼は精力的な性格(energetic character)を持つ。欲求と衝動に関する個性(individuality)が発展するのを奨励すべきでないと考える人は皆、次のことを主張しなければならない。すなわち、社会は強い本性を必要としてはいない——社会は多分の性格(much character)を持つ人々が大勢いることによってそれだけ良くなることはない——のだし、またエネルギーの一般的平均が高いことは望ましくない、と(CW18, 264)。

性格を持つ人とは、欲求と衝動が自分自身のものである人、すなわち欲求と衝動が自分自身の本性の表現になっている人であるとミルは述べている。そこで精力的な性格を持つ人とは、衝動と欲求が自分自身のものであるだけでなく、それらが強いものであり、強い意志の支配下にある人であるとされる。そして、欲求と衝動に関する個性が発展すると、強い本性、大きなエネルギーとともに多分の性格が生み出されることになる。

いずれにせよミルはここで「個性」という言葉を、欲求や衝動が自分のものであることを示す「性格」という言葉と同じ意味で用いている。この

ようにミルのいう個性には、欲求や衝動が自己の本性に適合しているという側面がある。この事態を自己適合性と呼んでおこう。

ところで、ここでいう欲求や衝動とは何なのか。ミルは『功利主義論』第4章において、欲求と快樂は同一の心理学的事実の2つの異なる名付け方であると述べている¹⁰。

また、衝動についても、ミルは「ベンサム哲学」のなかで次のように述べている。

……我々の行為を決定する苦痛と快樂には、行為の後に生じるものもあるが、行為に先立つ (*precede*) ものものもある。人間は何かをしたいという誘惑にかられたとき、刑罰に対する恐怖によって、あるいは犯罪行為を行った後で (*after*) 耐えなければならない良心の呵責に対する恐怖によって犯罪を為すのを思いとどまることもありうる (*may*) のである。このような場合には、彼の行為は動機のバランスあるいは利益のバランスによって支配されているということはある程度妥当であろう。だが、彼はその行為を行うという考えそのものにひるみ、彼自身がその行為を行うための肉体的な力さえ失ってしまうという場合がありうる (*may*) し、また十分にありうるのである。彼の行為は苦痛によって決定されるのであるが、その苦痛とは、行為の後で予想されるものではなく、行為に先立つものである。このようなことはありうる (*may*) だけでなく、もしありえないとしたら人間が真に有徳であることはできないことになってしまう。……したがって、行為はときには (*sometimes*) 利益 (*interest*)、すなわち熟慮された意識的目的によって決定されるし、ときには衝動 (*impulse*)、すなわち究極目的をもたず、行為や不作為がそれ自体で目的となっている感情 (連想ともいえるが) によって決定されているというのがいつそう正しい (CW10, 12-3)。

我々の行為を決定する苦痛や快樂には、行為に後続するものと行為に先行するものとがあるとミルは述べている。行為に後続する快樂または苦痛とは、我々の行為の結果として予想されるものである。たとえば、ある行為を行った結果処罰されたり良心の呵責を感じたりすると予想して、当該の行為を思いとどまる場合、当該の行為に後続する苦痛が我々の行為あるいは不作為を決定している。これに対して、当該の行為を行うという考えそのものに苦痛を感じて、当該の行為を行うのを思いとどまる場合、当該の行為に先行する苦痛が我々の行為あるいは不作為を決定している。そしてミルは、行為に後続する快樂または苦痛を、利益すなわち熟慮された意識的目的と言い換えており、行為に先行する快樂または苦痛を、衝動すなわち究極目的をもたず行為や不作為がそれ自体で目的となっている感情または連想と言い換えている。このように、ミルのいう衝動とは行為に先行する快樂または苦痛なのである。

先に見たように、ミルのいう個性には、自分自身の本性に対する欲求や衝動の適合性という側面があった。そして、ミルにおいて欲求とは快樂と同一の心理学的事実を指示しており、また衝動とは行為に先行する快樂または苦痛のことであった。したがってミルのいう個性には、自分自身の本性に対する快樂または苦痛の適合性という側面があるといえる。

(b) 自己統制

すでに引用した『自由論』第3章で、精力的な性格を持つ人の衝動は強い意志の支配下にあるとされていた。そして後続する文で、欲求と衝動に関する個性が発展するのを奨励すべきでないと考え人は、社会は強い本性を必要としないしエネルギーの一般的平均が高いことは望ましくない、と考えなければならないとミルは述べていた。したがって、ミルのいう精力的な性格と発展した個性とは同じものであると考えられる。すでに見たように精力的な性格を持つ人の衝動は強い意志の支配下にあるの

で、発展した個性を持つ人の衝動も強い意志の支配下にあるということになる。このように、発展した個性には確立した自己統制という側面がある。

(c) 調和

ミルは『自由論』でフンボルト (Wilhelm von Humbolt) を引用して次のように述べている。すなわち「人間の目的、つまり理性の永遠不変の命令によって規定されており、あいまいで一時的な欲求によって示唆されたのではない目的は、人間の力能を、完全で整合的な全体へと最高度に、もっとも調和的に発展させることである (the highest and most harmonious development of his power to a complete and consistent whole)」。したがって、「あらゆる人間がたえず努力を向けなければならない、また特に同胞に影響を与えようとする人々がつねに注意を払わなければならない」目的は、「力能と発展に関する個性 (individuality of power and development) である」。人間の確固たる目的は、人間の力能を完全に整合的な全体へと調和的に発展させること、すなわち力能と発展に関する個性であるとミルは述べている。このようにミルの考え方によれば、個性の発展は調和の取れたものでなければならないとされている。

また、すでに見たようにミルは、「欲求と衝動が自分自身のものである人、欲求と衝動が自分自身の陶冶によって発展させられ、変化させられてきた自分自身の本性の表現になっている人は、性格 (character) を持つといわれる」と述べていたが、そのすぐ前の段落で彼は次のように述べている。

しかしながら、欲求や衝動とて、信念や自制心とまったく同様に、完全な人間の一部分なのである。そして、強い衝動が危険なのは、それが適切なバランスを保っていないとき、つまり一組の目標と性

向が発展して力強いものになっているのに、それと共存すべき他の一組が弱く不活発なままであるときだけである。人々が誤った行為をするのは、欲求が強いからではない。良心が弱いからである。強い衝動と弱い良心の間には何の自然的なつながりもない。自然的なつながりはその逆である (CW18, 263)。

個性すなわち性格を持つ人は、自分自身の欲求と衝動を持っている。そして欲求と衝動が、信念、自制心、良心との間に適切なバランスを保って発展していかなければ、当人が誤った行為を行う危険が高まるとミルは述べている。このようにミルの考え方によれば、個性が発展するときに、欲求や衝動は良心と調和していなければならないとされる。つまりミルのいう個性には、その構成要素の調和という側面があるのである。

(d) 人間的な能力の発達

『自由論』第3章でミルは次のように述べている。

しかし、もし人間が善なる存在者によって創られたものだと思えることが宗教の一部であるとすれば、次のように信じることのほうがその信仰と整合している。すなわち、この存在者がすべての人間的能力を与えたのは、それらが育成され発達させられるためであって、根こそぎにされ消し尽くされるためではない。そしてこの存在者は、自己の創造物がそこに具現された理想的概念にいくらかでも近付くたびに、また彼らの理解、行為、享受の能力のいずれであれそれがいくらかでも増すたびごとに喜ぶのだ、と。人間的卓越の典型としては、カルヴァン派のそれとは違ったものがある。人間性は、単にそれを断つこと以外の目的のために付与されているのだ、という人間についての考え方がある。「異教的自己主張」は、「キリ

スト教的自己否定」と同じように、人間の価値を構成する要素である。自己発展というギリシア的な理想があるのであって、プラトンのキリスト教的な克己の理想は、それとまじり合っているが、しかしそれにとってかわるものではない (CW18, 265-6)。

人間が善なる神によって創造されたと信じるならば、神が人間的能力を与えたのはそれを発達させるためである。だから神は、人間が理解、行為、享受の能力を発達させることを喜ぶだろう。このような考え方を、ミルは異教的自己主張、自己発展というギリシア的な理想と呼んで、神の意志に自己を委ねる能力以外の能力を撲滅することをよしとするいわゆるカルヴァン派の考え方と対置している。したがって自己発展は、理解、行為、享受の能力などの人間的能力の発達を含んでいると考えられる。ところですでに見たように、ミルは個性と発展を同一の事柄であると述べていた。そうするとミルのいう個性は、人間的能力の発達を含んでいると考えられる。

(e) エネルギー

すでに引用した『自由論』第3章でミルは次のように述べていた。すなわち「欲求と衝動に関する個性 (individuality) が発展するのを奨励すべきでないと考える人は皆、次のことを主張しなければならない。すなわち、社会は強い本性を必要としてはいない—社会は多分の性格 (much character) を持つ人々が大勢いることによってそれだけ良くなることはない—のだし、またエネルギーの一般的平均が高いことは望ましくない、と」。欲求と衝動の個性が発展すると強い本性が生じ、社会におけるエネルギーの一般的な平均が高くなるとされる。このように、ミルのいう個性は大きなエネルギーを持つことを含意している。またすでに見たように、ミルのいう精力的な性格は発展した個性と同じものであった。したがっ

て、発展した個性は大きなエネルギーを含んでいると考えられる。

これまで見てきたように、ミルのいう個性には、(a) 自己適合性、(b) 自己統御、(c) 調和、(d) 人間的な能力の発達、(e) エネルギーという側面がある¹¹。ところでこれらの側面の関係について、ミルは明確に述べていない。では、ミルのいう個性を首尾一貫した概念として解釈するならば、どのような関係があると考えられるだろうか。本稿ではそれについて詳しく論じることはできないが、次のように解釈することも可能だろう。すなわち、ミルのいう個性の核心は自己適合性であり、そのような個性の主要な特徴は、自己統御および人間的な能力の発達である。そして、自己統御が調和した個性をもたらす、人間的な能力の発達が大きなエネルギーをもたらすのである。

いずれにせよ話をもとに戻せば、個性の発展に貢献する快樂とは、個性のこれらの側面に貢献するものであると考えられる。

2.2 個性と幸福

さて、このような個性と幸福との関係について、ミルは以下のように述べている。

要するに、第一義的に他人に関係しない事柄においては、個性 (individuality) が自己を主張することが望ましい。その人自身の性格 (character) ではなく他の人々の伝統や慣習が行為の規則となっていて、人間の幸福の主要な構成要素の一つ (one of the principal ingredients of human happiness) であり、かつ個人的社会的進歩のまさに第一の構成要素をなすものが、欠けていることになるのである (CW18, 261)。

J. S. ミルにおける快樂の秩序

ミルは、第一義的に他人に関係しない事柄においては、つまり他人に危害を与えない限り、個性を發揮することが望ましいと述べている。そして彼は、個性を性格と言ひ換えたうえて、それらが人間の幸福の主要な構成要素の一つであると述べている。このようにミルは、個性と性格を同じ意味で用いており、しかも個性すなわち性格は幸福の主要な構成要素であると述べている。

また、今引用した箇所が続けて、ミルは次のように述べている。

この原則を主張する際に出会う最大の困難は、ある承認された目的に達するための手段の正当な評価にあるのではなく、目的そのものに対する一般の人々の無関心にある。もし個性の自由な発展が幸福のもっとも本質的な要素であると感じられているとすれば (If it were felt that the free development of individuality is one of the leading essentials of well-being), またもしそれが文明、指導、教育、教養などの言葉によって表されるすべてのものと同等の一要素であるのみならず、それ自体これらのものすべての必要な部分であり条件であると感じられているとすれば、自由が過小評価されるおそれはないだろうし、自由と社会的統制との境界を調整することが異常な困難を生むこともないであろう (CW18, 261).

個性すなわち性格が人間の幸福の主要な構成要素の一つであるという、すぐ前でミルが提案した原則を主張する際に出会う最大の困難は、個性の発展という目的そのものに対する人々の無関心である。このような無関心が一掃されて、個性の自由な発展が幸福のもっとも本質的な要素であり、しかも文明、指導、教育、教養などの必要条件であると感じられているようになれば、個性発展の1つの条件である自由が過小評価されることはないだろうとミルは述べている。このようにミルは、個性の自由な発展が幸

福のもっとも本質的な要素であるだけでなく、文明、教育、教養などを可能にする基盤にもなると述べて、個性の自由な発展を非常に重くみている。

さらに、今引用した箇所と同じ段落の末尾でミルは、先にみたとおりフンボルトの文章を引用している。

ドイツ以外ではほとんどの人が、碩学としても政治家としてもほまれの高いヴィルヘルム・フォン・フンボルトが、ある論著の主旨とした次のような学説を理解することさえできない。すなわち、「人間の目的、つまり理性の永遠不変の命令によって規定されており、あいまいで一時的な欲求によって示唆されたのではない目的は、人間の力能を、完全で整合的な全体へと最高度に、もっとも調和的に発展させることである」。したがって、「あらゆる人間がたえず努力を向けなければならない、また特に同胞に影響を与えようとする人々がつねに注意を払わなければならない」目的は、「力能と発展に関する個性である」(CW18, 261)。

ここでミルはフンボルトからの引用文を、個性すなわち性格が人間の幸福の主要な構成要素の一つであるという自分の主張を支持するものとして引用している。そのような観点からフンボルトからの引用文を読むと、理性の命令によって規定された人間の目的は、人間の力能を調和的に発展させることであり、力能と発展に関する個性をもたらすことであるという考え方を見出すことができる。今引用した3つの箇所から、個性すなわち性格が人間の目的である幸福の主要な構成要素の1つであるというミルの考え方を見て取ることができる。

ところで『功利主義論』においてミルは、幸福とは快樂と苦痛の不在とを意味すると述べていた。そうであるならば、幸福の主要な構成要素と

は、当人にとって重要な快樂である。個性が重要な快樂であるというのは、個性の發展がもたらす快樂が重要な快樂であるということであろう。

ここで、尊嚴の感覺についてミルが次のように述べていたことを想起しよう。すなわち、「この [尊嚴の] 感覺はそれが強い人の幸福の本質的な部分をなしているので、これと対立するものは、瞬時を除けば彼らにとって欲求の対象になることができないだろう (which is so essential a part of happiness of those in whom it is strong, that nothing which conflicts with it could be, otherwise than momentarily, an object of desire to them.)」とミルは述べていた。尊嚴の感覺と対立するものが欲求の対象になり続けることができないとされた理由は、この感覺がそれが強い人の幸福の本質的な部分をなしているからであった。

そうすると、ある人の幸福の本質的な部分をなすものと対立するものは、その人の持続的な欲求の対象になることができない。すでに見たように、『自由論』においてミルは、個性あるいは個性の自由な發展が幸福の本質的な構成要素であると述べていた。そうすると、個性の發展と対立するものは、瞬時を除けば欲求の対象になることができないだろう。結果として、個性という重要な快樂に貢献する快樂は当人にとって肯定的価値を持つことになり、個性の快樂に貢献しない快樂は欲求の対象になることができないので当人にとって肯定的価値を持たないことになる。

II でこれまでに述べたことをまとめておく。ミルにおいて尊嚴の感覺は、さまざまな快樂を高級快樂と低級快樂に分類する評価規準になっていた。そして、個性の發展に対する貢献が、さまざまな快樂の価値の序列を、尊嚴の感覺とは異なる仕方で決定するもう一つの評価規準になっていた。

では、尊嚴の感覺および個性の發展と、I でみた道德、処世の思慮、審美という快樂の3つの領域とはどのように関係するであろうか。この問題をめぐっては、尊嚴の感覺あるいは個性の發展が審美的領域に属してい

るという解釈が、近年提示されている¹²。この解釈については、稿を改めて検討することにした。

おわりに

ミルにおいてさまざまな快樂は、道徳、処世の思慮、審美という3つの領域に分類できることを見てきた。くわえて快樂の価値が、尊厳の感覚と個性の発展に対する貢献の大きさに応じて序列化されることを明らかにした。

残る課題となるのは、第1に、快樂の3つの領域と尊厳の感覚および個性の発展という2つの評価規準との関係を明らかにすることであり、そして第2に、尊厳の感覚と個性の発展という2つの評価規準の関係を明らかにすることである。

註

- 1) ミルにおける科学・技術、生活の技術については多くの文献で論じられている。たとえば、泉谷周三郎「ミルの功利主義における善と正」杉原四郎、山下重一、小泉仰編『J. S. ミル研究』御茶ノ水書房、1992年、103-24頁、成田和信「J. S. ミルの道徳性について」『人文科学』3、1988年、23-52頁を参照。
- 2) 科学と技術という言葉のミルによる用法は、以下の2つの点で一般的な用法とは異なる。第1に、今見たようにミルにおいて科学は技術の補助であるのに対して、一般的な用法では、技術は科学の応用である。たとえば、医学という科学の応用が医療技術であり、工学という科学の応用が工業技術である。第2に、ミルは技術の中にその目的設定を含めているのに対して、一般的な用法によれば科学・技術の目的や理念は、科学・技術とは別のものである。ミルが技術の中にその目的を含めることになるのは、すぐ後で見るように彼が技術のなかに道徳、処世の思慮、審美などを含めているからである。このように、科学と技術という言葉のミルによる用法は独特のものであることを示すために、ミルという art という言葉は、ときに「技芸」、「技法」、「術」、「アート」などとも訳されてきた。しかし本稿ではミルに特有な意味を含むものとして、あえて「技術」と訳出しておく。
- 3) ミルにおいて功利という言葉は明らかに快樂を指示しているが、功利が欲求充足を指示するという解釈をも排除しないために、功利という言葉を用いるとライリーは述べている (Riley, J., *Liberal Utilitarianism*, Cambridge University Press, 1988, p. 164.)

J. S. ミルにおける快樂の秩序

- 4) Riley, *op. cit.*, p 181.
- 5) Riley, *op. cit.*, p 170.
- 6) ライリーがこれらの快樂をあえて功利と呼ぶ理由については、前註(3)を参照。
- 7) ミルは、“higher/lower”という言葉の代わりに、“(superior)/inferior”という言葉を用いることもある。
- 8) 水野俊誠「J. S. ミルの幸福論再論」、『哲学』62, 2011年(印刷中)を参照。
- 9) ミルのいう「性格」という言葉は、すべての人が持つ性質を指す場合と、理想的な人だけが持つ性質を指す場合があると米原優は述べている。そして、前者は「ある人が習慣的に追求する諸目的」であり、後者は「環境を自らの性格に従わせようと努力する」積極的な性格であるとされる。本稿では、主として後者の意味に焦点を当てている(米原優『功利主義と人権—ミルにおける功利主義的権利論の検討—』(博士論文), 2009年.)。
- 10) 「そしていまや、このことが現実になり立っているのかどうかを決定するために、すなわち人間がそれ自体のために欲する(desire)ものは、人間にとって快樂(pleasure)であるもの、またはそれがなければ苦痛であるもの以外に、果たして何もないのかどうかを決定するために、我々は明らかに、事実と経験の問題、同じ様な問題がすべてそうであるように、証拠をもちださなければならない問題に到達したのである。そのことは、他人の観察によって手助けされた、実践された自己意識と自己観察によってのみ決定され得る。これらの証拠を公平に調べてみれば、以下のようなことが判明するであろうと私は信じる。すなわち、あるものを欲すること(desiring)とそれが快い(pleasant)と見なすこと、それへの嫌悪とそれが苦痛だと考えることは、まったく不可分な現象であり、あるいはむしろ同じ現象の2つの部分であり、言葉の厳密な意味で、同一の心理的事実の2つの異なる名付け方であること、ある対象が望ましい(desirable)と考えることとそれが快い(pleasant)と見なすことは1つの同じ事柄であること、そしてあるものを、その観念が快い程度に比例してではなく欲することは、生理学的にも心理学的にも不可能であることである」(CW10, 281)。
- 11) クリスプは、ミルのいう個性の構成要素として、「自分の人生を、単に社会的慣習に基づくだけでなく自分自身で営む」自律や「強い欲求や衝動を持つ精神的な性格」などをあげている(Crisp, R., *Mill on Utilitarianism*, Routledge, 1989.)個性の主要な側面を説明した他の文献として、山下重一「J・S・ミルの個性論」『國學院法學』47(3), 2009年, 85-131頁, Skorupski, J., *John Stuart Mill*, Routledge, 1989, Riley, J., *Mill on Liberty*, Routledge, 1998などがある。
- 12) Ryan, A., *The Philosophy of John Stuart Mill*, 2nd ed., Humanity Books, 1970, Riley, *op. cit.*, 馬嶋 裕『自由と自律—J. S. ミルの自由主義の倫理的焦点—』(博士論文), 2003年。